

## 論文要約

### 牧畜社会における経済基盤の変化に伴う生活文化の民俗的変容

#### —内モンゴルにおける半農半牧村落を中心に—

内モンゴルの遊牧民は主に牧畜を営んできた。だが、歴史的に長い間農耕化の圧力にさらされて、生業形態の変化の道を余儀なくされた。万里の長城沿線や東北三省（黒龍江省、吉林省、遼寧省）との境界線に沿った一部の地域では、秦、漢時代から畑作を中心とする農耕生業が始まり、それらの地域は農牧交錯地帯と呼ばれてきた。そして、それらは北の遊牧勢力の盛衰に伴って牧畜と農耕の消長が繰返される地帯になった〔恩和 2010、バト 2006〕。清朝や中華人民共和国成立直後の開墾によって、そのような農牧交錯地帯はさらに北へ広がった。中国の社会制度の変化に応じて、1950年代からの社会主義集団化、1980年代からの家畜の請負制度の実施された。また、1990年代から始まった牧草地の個人への分配という時代に続き、現在では放牧の完全禁止や部分禁止に伴う「生態移民」<sup>[1]</sup>の時代に至っているとされる。特に改革開放によって市場経済化が進むと、内モンゴル全域は生業変化（牧畜から農耕へ）だけではなく、環境劣化、市場経済化の浸透に直面した。このように、著しい変化を経験しているのである。

農耕化、社会主義的近代化や、世界経済との一体化などを背景に、牧畜民はそれらと向き合ってきた。そのプロセスの中で、彼らの生活と民俗文化にどのような変化が起こっているのかについて考察することを本論文の目的とした。

内モンゴル東部地域における半農半牧村落を事例として取り上げ、次の3点を問題とする。①内モンゴルにおける牧畜はどのように営まれているのか。②そこに暮らす人々にとって牧畜を営むとはどのようなこととして捉えられているのか。③生業変化の通時的経緯とそれに伴った伝統文化の位置づけをどのように評価したらよいのか。これらの問題を、国家政策や自然条件、資源利用の在り方、現在の文化の在り方などの側面から明らかにしたい。

また、異文化接触の影響を受けつつ、漢民族文化あるいは農耕文化要素をそのまま吸収したうえで、一部の伝統モンゴル族の民族文化要素と一部の漢民族文化要素をともに利用し、時代の発展要求に合わせながら新たな民族文化を創造する可能性もあると考えられる。言い換えれば、現代半農半牧村落の生活文化は、一部のモンゴル族の伝統民族文化、一部の漢民族文化と一部の新たな民族文化によって構成される可能性が高い。本論文の目的はこれらの問題を解明すべきである。

---

<sup>[1]</sup> 生態移民とは、中尾（2005）の定義からまとめると、ある地域の生態環境を保全するため、あるいは失われた生態環境を回復するために行われる人の移動行為もしくは移動する人々を指す。

本論文は、序章、終章以外に二つの部で構成される。

序章：研究背景と目的、先行研究およびその問題点を整理したうえ、本論文の視点を記述し、さらに、調査地と研究方法、論文の構成を記した。

第1部：内モンゴル牧畜社会における経済基盤の変化

第1章：内モンゴルにおける農業開発とその影響に関する考察——ホルチン左翼後旗を事例として——

歴史文献資料を振り返ることで、内モンゴルにおける農業開発史を全体的述べ、その影響を生業と生態の面から論じてきた。本論文の調査地である内モンゴル東部ホルチン地区における漢民族移民および土地開墾との関係から半農半牧畜業の形成過程を明らかにした。結論として、内モンゴル東部地域は遊牧による牧畜業から定住放牧による牧畜業と耕種農業とを両立させた半農半牧畜業に転換したというものである。半農半牧畜業は、現在の内モンゴル東部地域の最大の特徴である。しかしながら、度重なる開発の過程において草原の減少・劣化・砂漠化に進んできた。内モンゴルの砂漠化などの環境問題は、清朝以降の農地開発とモンゴル人の伝統的遊牧社会体制の崩壊に伴って顕在化し、改革開放以降の市場経済体制への転換と農牧業政策の影響によって深刻化した。砂漠化の実態を地域的に見れば、内モンゴルの東部のホルチン沙地では、沙漠が清朝半ばから民国にかけての時期に形成され、1960年代から2000年まで一貫して進み、1980年代に入って、スピードを増してきている。中国政府は、こうした砂漠化問題に対して、近年退耕還林（草）、退牧還草、生態移民などの環境政策を講じてきたが、これらの政策の実施に伴って新たな課題と問題点が生じていることが多くの研究に指摘されている。

第2章：内モンゴルにおける「生態移民」環境政策とその影響に関する一考察——バイリン右旗の2つの移民村を事例として——

草原の砂漠化問題が注目されるようになり、退化した環境を回復する目的で「生態移民」政策が打ち出されている。内モンゴルの環境問題に関する従来の研究について、研究者たちの関心は砂漠化問題に集中する中、最近では「禁牧」、「生態移民」など環境政策の影響と問題点を取り上げる研究が増えている。新しい村や町を建設し、環境の脆弱な地域に拡散している人々を移住させ、生態環境の回復と貧困緩和を図るものである。本章では、内モンゴルにおける生態移民事業の現状と問題点を述べ、バイリン右旗での現地調査事例分析を加え、生態移民事業の問題点を指摘した。焦点は主に移住された牧民の生活問題、移転先の新たな問題などに絞られる。「生態移民」政策は、環境の回復と生活の改善とを目的としていた。しかし、結果的には民俗文化的な面にも大きな変化をもたらすことになった。「休牧」、「禁牧」、「生態移民」という生態保護政策は、都市部や移民村に移住させられた牧畜民の生産様式を大きく転換させた。牧畜の移動は制限され、牧民の完全定住化時代、畜舎飼育牧畜時代に入ったといえる。そして、移民たちの食生活をはじめとする生活・風俗・慣習を激変させている。この時期から、場合によって牧畜という生業そのものがなくなり、それを基礎とする民族文化も喪失の危機にさらされている。

第3章：市場経済化が進む現代牧畜業のあり方

この章においては、生業経済から市場経済への転換時における牧畜民の適応の様態を生活全般に浸透する金銭意識や生産と消費の側面から記述した。同時に、市場経済化の下で生きる牧畜民の姿を描いた。内モンゴル牧畜社会では市場経済化が進行し、金銭に対する意識が生活の隅々まで浸透した。こうした市場経済化による生産と消費の変化や、それらの変化をもたらした原因の一つとなる農業産業化政策の推進に焦点をあわせて論じた。市場経済化が進むプロセスで調査地の人々の金銭に対する意識は高まり、彼らの生産、消費も変化した。しかし、全てが変わって伝統的なものが消失したともいえない。調査地の人々は、変化にさらされながらも伝統を市場経済化の中で生かしている面も見られる。将来的に世界経済は一体化されるていくだろう。その中で、内モンゴルの牧畜社会が、その伝統をどのように生かし、またそれをいつまで保持できるのかは定かでない。しかし、少なくとも現時点では、伝統を生かしながら生活していくという傾向も見られた。

第2部：半農半牧村落における経済基盤の変化に伴う生活文化の民俗的変容——生業、衣食住、言語伝承、儀礼、信仰を中心に——

第1部において、内モンゴル牧畜社会における経済基盤の変化の全体を描いた。第2部では、それら経済基盤の変化に伴って生じた生活文化の民俗的変容について検討した。

### 第1章：家畜飼養と生業

筆者のホルチン半農半牧村落であるダランアイル・ガチャーで実施した調査資料に基づき、放牧方式の変遷過程を取り上げた。そして、家畜の飼料、飲用水、畜舎建設の視点から生態環境が当ガチャーの生産習俗に及ぼした影響を明らかにした。また伝統的な家畜飼育習俗の存在形と現代市場経済からの影響を述べ、ガチャーにおける牧畜業生産習俗の日常形態からその特徴をまとめた。さらに牧畜具の機能に焦点を当て、その半農半牧村落社会における役割を解明した。

### 第2章：衣食住

まず、生業と食の関係、モンゴル人の伝統食について概観し、続いて調査地の農牧民の日常食生活における伝統食のあり方を分析した。次に、ガチャーの居室習俗を取り上げた。その村落、家屋の配置と敷地家屋構造や配置の特徴および変遷プロセスを分析した。最後に、衣生活の現状と特徴を利用率、色彩嗜好、デザイン、素材、消費率の視点から明らかにした。

第3章：言葉と命名では、次の5点について考察した。①農耕化や市場経済化に対応してきたモンゴル語の近現代化について②モンゴル人名文化の伝統と、生業変化や市場経済化時代に現れた人名の変化について③調査地の人名の特徴と人名文化における新創出について④地名文化におけるモンゴル語地名の伝統とその生業との関わりについて⑤内モンゴルにおける地名の変容や現状と、地名を保全するための対応について

### 第4章：人生儀礼

まず、誕生儀礼を取り上げた。混住背景に合わせて「子を授かる」意味からガチャー人の生命観を検討した。また出産の「場の移動」を伝統と現代とで比較し、その出産習俗を明らかにした。次に、婚姻儀礼を取り上げた。先行研究とガチャーでのフィールド

調査を基に、1950年代から2010年代までの婚資や婚姻習俗の連続性と変化について考察した。最後に、死にまつわる習俗を取り上げた。主に死に対する準備、死に関する儀礼と墓地に関する習俗という3点を考察した。

第5章： 祭祀と信仰において自然崇拜信仰であるオボの復活の現状と特徴を報告した。市オボ、旗オボ、村オボの事例を取り上げた。一時廃棄されたオボは、それぞれの地域においてそれぞれの特徴を示しながら復活し始めている。それらの復活したオボは、オボ文化における生業的、または宗教的意味のうち、どちらか一方を重視しているように見えた。だが、その底にはオボ文化を完成した生業の魂が生きている。

終章： 内モンゴルにおける生業選択上の生態的論理、経済基盤の変化に伴う生活文化の変容の特徴と要因をまとめた。市場経済化が進む内モンゴル牧畜社会において、生態環境の保全と経済利益は矛盾しているように見える。その矛盾している両面を調和的に実現させるためには、その社会を支えてきた生業やその生業を基盤として蓄積されてきた人々の知識や意識を重視しなければならない。

2015～2018年までホルチン左翼後旗ダランアイル・ガチャーとバイリン右旗移民村で行った筆者のフィールド調査のデータを根拠にして、経済基盤の変化や生業形態の変遷に伴う異文化接触に関する仮説を検証した結果は次のようである。遊牧から半農半牧生業形態へ転換した結果、「モンゴル族の伝統文化」でも「漢民族文化」でもない文化となった。それは、遊牧文化と農耕文化の中間に位置づけられ、かつ一つの時代性を有する現在変容中の新しい地域文化である。現代半農半牧地区におけるモンゴル族の民族文化は、一部の「モンゴル族の伝統的な或いは牧畜的な文化」、一部の「漢民族文化」と一部の「新たな民族文化」によって構成されているという結論が実証された。各文化種類に当てはまる内容を章ごとに細かく挙げた。その中で、文化の「伝承」現象を中心として変容している「モンゴル族の伝統文化要素」は、彼らの文化の「内空間」を築き上げた一つの原動力である。それは、主に牧畜業、信仰活動の中に現れている。また、文化の「吸収・創造」現象を中心として変化している「漢民族文化要素」と「新たな民族文化要素」の部分は、文化の「展開」を負う外部的な影響力である。それは、主に衣食住、人生儀礼、年中行事の中に見られた。それは、牧畜業の持続およびモンゴル家庭の存在、混住生活、東部半農半牧地区におけるモンゴル族の多重的なアイデンティティと深い関係があったことが分かった。

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻

包 周娜 (ボウ・ジョナ)